会員研究

大伯皇女
―早すぎる母の死―

遠田　千代吉

一　はじめに

令和となり、五月十八日大村文乃さん（東京都・九十三歳）の投書が朝日新聞に載った。大村さんの兄は万葉短歌の愛好家であったが、昭和十八年大陸に戦没し、のち戦友の持ち帰った古びた遺品ノートに次のように綴られていたとのことである。「万葉の女流歌人の中で最も慕わしい人は大伯皇女。教養の高い優しい愛情豊かな美しい女性」。投書をされた大村さんは、兄上が荒んだ戦場にあっても心の中にいつも、理想の女性として大伯皇女を抱き続けたことに一種安堵の気持ちを述べられている。

生きた時代の足跡と万葉集に残る秀歌六首を通じて、大伯皇女はこのように、いつの世も人々の心に生き続けている。この大伯皇女の生涯を決定づけた要因として、次の三つのことが挙げられる。

①　母大田皇女の早逝　②自身の斎王への就任　③弟大津皇子の謀反の嫌疑と処刑

本稿では、大伯皇女の歩みを、①の「母大田皇女の早逝」を中心に論を進めていきたい。

二　飛鳥へ

征西途上の海上で生を受けた大伯皇女は筑紫に置かれた宮で三年の月日を過ごす。しかしながらこの間、社会政治情勢は多難であった。宮の移動直後の斉明天皇の崩御、さらには百済救援のための出兵も、天智二年（六六三）八月白村江の海戦での敗北により終結を迎えることとなる。この敗北を受け、唐・新羅連合軍の九州への来攻の恐れの中で、官人・豪族の動揺を鎮めて行かねばならず、朝廷の治政も困難を極めたと思われる。このうえは一刻も早く大和の後飛鳥岡本宮へ引き揚げることが急務である。筑紫へ一斉移動した宮家も、再度船上の人となった。この時、既に大伯皇女は三歳、筑紫に生まれた弟大津皇子は一歳、母大田皇女の実妹・鸕野讃良皇女が同じく当地で生んだ草壁皇子が二歳であった。

直木孝次郎氏[二]は、この時の状況を次の通りみずみずしく叙述している。「東へ航する船上には、何のうれいもなく遊びたわむれる三

人の幼な子（大伯・草壁・大津）の姿があったと思われる」。まさに三人は、のちに訪れる各々の運命は知らずに、無心の一つの輪となっていたのである。

三　母・大田皇女の死

（一）大田皇女の夭逝

後飛鳥岡本宮に帰り、母とともに静かに過ごす大伯皇女を突然に悲劇が襲う。七才となった幼い春に母が突然に急逝する。『日本書紀』は次の通り、この事実を記述する。

「①天智六年（六六七）春二月二七日（○数字は筆者区分表示）

②天豊財重日足姫天皇（斉明天皇）と間人皇女とを小市岡上陵に合わせ葬せり。

③是の日に皇孫大田皇女を、陵の前の墓に葬す。」

全体の行文の解釈は後に譲り、ここでは③の記述、大田皇女の墓葬（薨去）に着目する。この時は近江京への遷都（同年三月）の直前であり、通説のとる大田皇女の生年を六四四年とすれば、二四歳での若くしての夭逝である。死因は述べられていないが病死以外考えられない。幼い大伯皇女はどんな気持ちで、母の死を見つめていたのだろうか。

（二）『書紀』葬送記事の背景

さきの天智六年の葬送記事に関わる三人の死亡時期について、『書紀』の上で改めて見てみると次の通りとなる。

○斉明天皇　「斉明七年（六六一）七月二四日、天皇、朝倉宮に崩りましぬ」

○間人皇女　「天智四年（六六五）二月二五日、間人大后薨りましぬ」

○大田皇女　「天智六年（六六七）二月二七日、皇孫大田皇女を陵の前に葬す」

つまり同じ日付の中の記録であるが、各々死亡時期は時の経過の中で違うのである。

（三）葬送記事解明の鍵「り」

ここで改めて天智六年の葬送記事の全体行文の解釈を行う。

斉明天皇、間人皇女にかかわる②の行文は、「小市岡上陵に合わせ葬せり*」と「す」の連用形の「せ」につなげ「り」でおわる。一方、大田皇女にかかわる③の行文は、「陵の前の墓に葬す」と「す」の終止形で止められている。

全体の行文解釈のうえで、この「り」が重要である。「り」は、「あり」が上接の動詞（せ）の語尾の母音と熟合して「り」だけ残ったもの。基本義としては、すでにそういうことがあって、その事態の影響が、そこで述べようとしている時にまで及んでいることを表す語である。完了した動作・作用の結果が存続している意を表しているのである。これを踏まえて考えれば、③の大田皇女の葬送時には、②の斉明天皇・間人皇女の合葬は既に済んでいたのであり、①の日付は③の大田皇女の葬送記事の「是の日」にかかるものである。

従って、全体行文の解釈は次の通りとなる。「記録としての日付斉明天皇と間人皇女は小市岡上陵に合葬されているが、この日に大田皇女を陵の前の墓に葬った」

（四）『書紀』原文と訓読文

ところが行文解釈の上で、これで片付かないもう一つの問題がある。『書紀』の原文は漢文であり、漢文は助詞・助動詞がなく（ないしは少なく）、実質的な意味をもつ単語の順序で文法的な記述を行う。このことから今取り上げている葬送記事の記録も、②は「合葬」、③は「葬」のみで記述が終わっている。しかしながら漢文からの訓読文は、先に見た記述内容で識者の見解は一致しているものと思われる。

（五）大田皇女の眠る墓

既にふれたように、母大田皇女は斉明天皇と間人皇女の合葬された陵の前に葬られた。この意味からは斉明天皇陵が大田皇女の墓の所在を決定づける。

①「車木ケンノウ古墳」　宮内庁は高市郡高取町車木にある車木ケンノウ古墳を斉明天皇陵として治定している。また、この古墳は小高い山の頂にあり、頂から少し下がった所にある円墳を大田皇女の墓としている。しかしながら頂の古墳は、東出ケンノウ古墳と呼ばれる小円墳とされ、宮内庁の定める斉明天皇・間人皇女・建王の陵とするのには無理があると思われる。この一帯が古代越智の範囲に含まれるとは言え、自分の足で確かめても飛鳥からあまりに遠く、陵の所在地として心情的にも飛鳥から距離がありすぎる。

②「牽牛子塚古墳・越塚御門古墳」

一方、近時斉明天皇陵として有力視され、識者の一致する斉明天皇陵は牽牛子塚古墳である。明日香村越にあり、合葬を想定した巨

大な凝灰岩を刳り抜いた横口式石槨であり、石槨内は中央に仕切壁のある二室となっている。八角墳であり、天皇陵に相応しく、往時の風水思想にも合致する立地である。さきに見たように、間人皇女の薨去以降、斉明天皇と皇女が合葬されたとすれば、斉明天皇については改葬がなされたものと思われる。平成二二年には、同じ墓域内で、中央の石槨部から約二十メートル南東の場所で新たに、棺を納めた石室が見つかった。越塚御門古墳と命名され、大田皇女の墓として有力視されている。『書紀』に記録されている斉明天皇と間人皇女の合葬、大田皇女の陵前の葬りがすべて合致しており、牽牛子塚古墳が斉明天皇陵、越塚御門古墳が大田皇女の墓として間違いないと思われる。なお、現在牽牛子塚古墳は二年後の公開を目指して明日香村が整備中である。先般訪問した際には近づく雨天に備え、土盛りが目立つ古墳をシートで覆う作業におおわらわであったが、整備完成後には高所に堂々とした威容を見せる古墳として蘇る。また越塚御門古墳は現在土中に隠れるが、整備完成後は同時に姿を見せ、公開されるとのことである。私自身、両古墳が公開され、古墳の全容が見られることはうれしい限りであるが、石槨・石室が白日の下にさらされることには、一面畏れ多くもあり複雑な気持ちである。

（六）母を早く喪うこと

母大田皇女が早逝した時、大伯皇女は七歳、大津皇子は五歳であった。古代の往時にあっては、父子よりも母子関係がより緊密であり、子の養育は母が行った。幼い二人にとって、この母の存在という後ろ盾を失ったことは、以後の生涯に不利な運命を背負うこととなった。森浩一氏は古代の一女性が、母の形見として真澄鏡[四]と蜻蛉領布を持ち続けた事例を紹介している。大伯皇女も母の亡くなるとき、形見を手ずから渡されたに違いない。どんな形見を生涯持ちつづけ、泣き母を忍ぶよすがとしていたのであろうか。

四　大田皇女

ここで改めて大伯皇女の母・大田皇女についてふれておきたい。

（一）蘇我倉山田石川麻呂・遠智娘

大田皇女の母は、遠智娘である。大化改新時の有力な中央豪族であった石川麻呂は、乙巳の変の前、政争の動きの中で中臣鎌子連の仲立ちで、娘・遠智娘を中大兄皇子に嫁がせた。二人の間に生まれたのが大田皇女・鸕野讃良皇女（持統天皇）・建王である。建王は八歳で早逝するが、大田皇女・鸕野讃良皇女はともに大海人皇子に嫁ぎ、大伯皇女・大津皇子、草壁皇子が誕生した。一方、同じ石川麻呂の娘で、遠智娘と母を同じくする妹・姪娘も中大兄皇子に嫁ぎ、御名部皇女・阿閇皇女（元明天皇）生む。

（二）蘇我倉山田石川麻呂の系譜の重要性

大伯皇女の全容の姿をつかんでいくためには、母・大田皇女を通じた石川麻呂の系譜の理解が重要である。持統天皇は母の実妹であり、文武・元明・元正の各天皇も石川麻呂の系譜につながっている。大伯皇女の生涯を考える時、天武天皇の皇女としての立場に加え、この系譜を常に念頭に置く必要がある。それは、この石川麻呂につながる同胞の有力者が、皇女を陰に陽に支援し、皇女もまた、これに頼っていくこととなるからである。

（三）大田皇女の命名

この機会に、中大兄皇子・遠智娘との間に生まれた皇女である大田皇女、鸕野讃良皇女の名前の由来について考えておきたい。古代の当時、皇子・皇女の命名の背景となっているものは、大筋次の三基準[五]といえる。

イ　皇子・皇女の生まれた場所地名　事例　大伯皇女　大津皇子

ロ　当該の皇子・皇女の養育の費用を捻出する領地である封戸の地名　事例　葛城皇子

ハ　皇子・皇女を傅育、ないしは乳母をだした氏族名　事例　大海人皇子　草壁皇子

この三つの基準に照らし、「大田」、「鸕野讃良」の命名の由来はどうなっているのであろうか。従来の言及では、「鸕野讃良」については名称の特殊性から、場所は特定しやすく、河内国讃良郡からなづけられた名とされている。直木孝次郎氏は祖父の石川麻呂が蘇我の庇護の下にある渡来人の多い讃良郡に、皇女の封戸ないしは所領を設定したことからとの所説[六]を展開されている。首肯しやすい説と思われるが、讃良郡が河内の北部に位置し、蘇我氏の勢力が及ぶ河内

の南部・石川流域から離れること、さらに同じ考えで、姉の「大田」の由来説明が出来ないことが難点になっている。一方、「大田」の名の由来については、倭漢氏系の渡来氏族に「大田史」がいることから、渡来系の名かとの所説を見るのみで、ほとんど言及されてこなかったのが実状である。ここでは「大田」・「鷦野讃良」の由来をともに一つの、拠りどころから解明できないか、考察したい。

①大田皇女

畿内摂津国の三嶋の地は、古来開発が進み、重要な地域であった。古くは『書紀』・雄略天皇紀に「三島郡の藍原」への行幸が行われ、継体天皇も「藍野陵に葬る」の記録が見えている。一方、この地は氏族中臣氏の別業(田荘)であり、勢力基盤の拠点となっていた。『書紀』にみる皇極三年(六六四)の中臣鎌子連の神祇伯への就任要請に対して「再三に固辞びて就らず。疾を称して退でて三嶋に居り」(『家伝』では三嶋の別業)と記され、鎌子連にとっても帰るべき本貫の地であった。また、鎌子連の墓と伝えられる阿武山古墳が当地にあることも、中臣氏にとって三嶋の重要性を物語っている。この地は摂津国島下郡に位置しているが、北摂山地から流れ出る安威川を境に、左岸を中臣大田連、右岸を中臣藍連が各々本貫としていた。大田は現在宮内庁が継体陵として治定している太田茶臼山古墳の所在する地域であり、太田神社・太田廃寺もあり、大田連の在所として氏族中臣氏にとっても重要な拠点であったことは間違いない。また、「太田」の地名表記が見られるが、古くは「大田」と表記した。ここでは大田皇女の「大田」は、この地に求められ、後述するように中臣鎌子連の封戸提供(ないしは同氏族大田連の傅育役就任)により「大田」となったとしたい。

②鷦野讃良皇女

三嶋だけでなく河内国枚岡の地も、中臣氏と深いゆかりを持つ地であった。同地に鎮座する枚岡神社は、中臣氏の祖神とする天児屋根命・比売神を祀り、後の春日神社の本源となる神社である。この神社を祀り、生駒西麓を勢力範囲とするのは、中臣平岡連であった。この枚岡神社域に接する隣の郡が讃良郡である。讃良郡を含む当地域は、古代、河内湖が湾入し、生駒山地より流出する河川も多く、百済からの渡来人が入り、「牧」が営まれ、王権にとっても枢要な地であった。『倭名類聚抄』によれば、讃良郡は南部より北に、郷が順次、山家・甲可・枚岡比良乎加・高宮・石井(小文字はルビ)と連なっていた。従来、この中で「鷦野」の地が不明とされてきたが、『倭名抄』にいう「枚岡」の地内に該当するとの教示[E]が得られた。この「枚岡郷鷦野」の地は、現在の四条畷市JR忍ケ丘周辺であり、忍岡古墳・讃良廃寺もあり、古くから讃良郡の支配拠点であったと思われる。ここでは「鷦野」の地が「枚岡」の郷内にあることが重要であり、枚岡の地名が物語るように、中臣平岡連の勢力が及んでいたと考えられるのである。『新選姓氏録』にも平岡連の氏名は、「讃良郡枚岡郷の地名にもとづくか」の記載もあり、中臣平岡連と讃良郡鷦野の地とのつながりは濃厚である。ここでも鷦野讃良皇女の「鷦野讃良」は中臣氏につながり、中臣鎌子連の封戸提供により「鷦野讃良」となったとしたい。

③中臣鎌子連の媒ちについて

これにより、「大田」・「鷦野讃良」の名の由来が共通して解明に向かうが、果たして中臣鎌子連の封戸ないしは傅育役の拠出はあり得るのだろうか。『書紀』にいう皇極三年(六四四)の中大兄皇子と両皇女の母遠智娘との結婚に際して「中臣鎌子連、乃ち自ら往きて媒ち要め、訖りぬ」との記載にみる、成婚への深い介入から「あり得る」とみる。また、乙巳の変の後、鎌子連は内臣に就任し、二千戸の封増(『書紀』・『家伝』)も得ていることから、あり得ることと思われる。即ち政略的婚姻の背景に、政略智謀の人・中臣鎌子連があり、「大田」・「鷦野讃良」の皇女命名にもつながっているとみている。このことは『万葉集』巻一―三、四番歌、題詞に見るように中臣間人連老が中大兄皇子の妹・間人皇女の傅育役となっていることからも、あながち否定される論拠ではないと考える。

(四)大田皇女の歴史的イメージ

大田皇女にかかわり伝わる史料は少ない。しかしながら史料が少なくとも、人間の営む歴史の不思議さで、「人柄イメージ」は伝わる。それは「静謐」である。この母の

静けさを大伯皇女は受け継ぎ、生きていくこととなる。

了

註

［一］直木孝次郎『万葉集と古代史』吉川弘文館　二〇〇〇・六

［二］旺文社『古語辞典』一九六〇・二

［三］飛鳥資料館『斉明紀』平八・一〇

［四］日本の古代一二『女性の力』森浩一「古代の女性を考える視点」中央公論社　昭和六二・一〇

［五］［六］直木孝次郎『持統天皇』吉川弘文館　一九六〇・三

［七］四条畷市歴史民俗資料館　野島稔館長　なお、『倭名抄』にみる「枚岡郷」については、異本では「牧岡郷」との所説もある。「枚」と「牧」が類似し、写本作成時の問題と思われる。